異文化に学ぶ

世界みたまま聞いたまま

上岡一嘉

東京書籍

異文学ぶ

世界みたまま聞いたまま

上岡一嘉

上岡　一嘉
かみおか　かずよし

1943年　早稲田大学商学部卒業，戦後ＧＨＱ，東京都経済局勤務を経て青山学院大学教授．早稲田・法政・中央・上智等の講師，白鷗女子短期大学学長を歴任。

現在　白鷗大学学長，商学博士。

著訳書　「経営政策と市場調査」（昭27．東洋書館）オリバー・ウェリントン著「予算統制」（昭27．東洋経済新報社）「マーケッティング」（昭29．丸善）「消費者はこうして作られる」（昭32．ダイヤモンド社）ウォルダー・ギルド著「マーケティングに成功する秘訣」（昭32．ダイヤモンド社）「Japanese Main Export Commodities」（昭36．東京ニューズ通信社）「マーケット・サーベイ」（昭38．日本生産性本部）「マーケティングの技術」（昭39．中央経済社）「これからの広告」（昭40．誠分堂新光社）「マーケティングの知識」（昭40．日経文庫）「外国企業の商法」（昭42．日経新書）「U. S History a Japanese View」（昭56．丸善）「格差をつける企業」（昭57．白鷗・出版局）「企業形態発展論」（昭60．紀伊國屋書店）

異文化に学ぶ
世界みたまま聞いたまま

1990年10月16日第１刷発行

著者　上岡一嘉

発行者　東京書籍株式会社
代表　小高民雄

印刷所　図書印刷株式会社

発行所　東京書籍株式会社
東京都台東区台東1-5-18　〒110

ISBN4-487-75301-5 C0036

まえがき

人の運命とは不思議なものである。

私が学んだ旧制中学では、張兆金君（台湾）が同じクラスにおり、後に転校生として金在九君（朝鮮）が机を並べる仲となった。第二次大戦直前のころである。このクラスメイトの出現により、私の心の中には、いつしかアジアへの関心が芽生えはじめていた。

髪の毛の色も目の色も、私とまったく異なる外国の人を知ったのは、中学三年のころの夏の日光の中禅寺湖畔でのことだったと記憶している。当時は香港や上海などに在住する欧米人、まれにはインドからの貿易商などが金谷ホテルやレークサイドホテルなどで夏のバカンスを楽しんでいたものである。中禅寺湖畔にはフランス大使館やベルギー大使館の別邸があり、男体山の連峰に囲まれた湖で彼等のヨット・レースが行われていた。田舎育

ちのうえ若かった私は、たちまち異文化圏に育った人々に魅せられてしまった。思えば、これが私の第一のカルチャー・ショックだった。

中学卒業の年に私は胸の病が再発し、闘病生活に明け暮れる暗い青春時代を過ごした。憧れの外国映画も見られず、翻訳ものの外国文学に親しむ以外に異文化に接する機会はなかったといってよい。

やっと健康を回復した大学一年の夏、私は外国人と毎日接することができるという理由から、一夏すべてを軽井沢のベーカリーでアルバイトをすることにした。ここで、国際結婚をされていた当時の東郷外相、実業家の玉置徐歩氏、手塚晩三氏、さらには上智大学のクラウス博士ともお近づきいただくことになる。仕事の中で毎日、英語とドイツ語に接することができたこのころを私の第二のカルチャー・ショックと呼んでおこう。

当時はすでに第二次世界大戦勃発直前であったが、私は国際結婚をされていた先輩に刺激され、また、異文化への関心を肌で感じていたため、当時の語学教育以上のものをやってみようと分不相応にも考えたのである。ドイツ人から直接ドイツ語による講義を受けたのもこの考えからである。もっとも、当時は英語は敵国語とされ、外国語の学習に熱中す

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ると西洋かぶれなどと呼ばれたりしたものである。ある晩、親しくなったフランス人の家に招かれた折などは、そのお宅を辞去したとたんに刑事に尋問され、あげくの果てにスパイ容疑で赤坂署に一晩留置され、こずきまわされた思い出もある。

私が初めて憧れの海外に出たのは一九五〇年の半ばであった。以来、私は機会あるごとに外国へ出かけるよう努めた。これが私の第三のカルチャー・ショックである。例えば香港のホテルでは、使える水に制限のあることを知らされた。フランスのエヴィアンが中味が水であるにもかかわらず結構重宝がられていることも知った。

一九六〇年代に行ったインドでは、衣食住や階級的差別の問題を痛感した。しかし、いっぽう、バランスのとれた国際感覚を身につけたタイの人々の知恵も分かりかけてきたころである。

一九七〇年代、時間の許されるかぎり仕事も兼ねて海外に出た時代である。このとき、カナダやアメリカで、あらためて時差が仕事の能率を損ねていることなどを痛感した。時差のないわが国のありがたみと、これが日本経済の発展にとって目に見えないプラスになっていることを知った。

一九八〇年代は、私たちの海外放浪もバカンスが主体となり、欧米人並に一個所で過ごすことが多くなってきた。このころ私がもっとも好んで過ごしたのはカナダのトロントとバンクーバーだった。

私の趣味の一つは旅をすることと言ってよい。われわれとは異なる生活と文化、自然を求めてさまよい歩くことである。要するに、この本は新たな発見と刺激を求めての凡人の放浪記なのである。そして、大正生まれの一人の男の未完成交響楽である。国際化時代に向かう若い人々に、狭い体験ではあるが、戦前・戦中・戦後を生きた私の体験と感動の一部を伝えたいという思いからこの本をまとめることを思い立った。これからの世代の人々が広い視野で物事を考え、国際国家日本の担い手となることを心から切望したい。

本書の編成にあたっては、宮内輝武教授にひとかたならぬご協力をいただいた。長く変わらぬ友情に深く感謝する。

平成二年盛夏　　著者

異文化に学ぶ　目次

I 国際化に向かう日本 12
(1) 日本たたき(ジャパン・バッシング)に思う 12
(2) 国際情勢の変化と外国人への対応 15
(3) 国際化時代の日本語 16
(4) 心の底までしびれる言葉 18

II 近くて遠いアジアの人たち 21
(1) オリンピックが韓国を変えた 21
(2) 台湾物語 28
(3) フィリピンの思い出 32
A／私を招いてくれたフィリピン 32
B／若き政治家との晩餐 35

C／サンチャゴ・ド・ラ・クルツ博士をしのぶ　39
D／中華式海鮮料理　45
(4)マレーシア……50
A／クアラルンプールで考えさせられたこと　50
B／クアラルンプールの空港からホテルまで　54
C／クアラルンプールの中国人　57
D／マラッカへの旅　61
(5)シンガポール——再会……67
(6)インド・タイ……72
A／戦場に架ける橋　72
B／正しい答え　75
C／タイで　76
(7)アジアの結び……79

Ⅲ ヨーロッパあれこれ　83
(1)汽車旅行……83

(2)イタリア……88
A／国際結婚——日本人亭主とイタリア人妻　88
B／サッカー顚末記　93
C／イタリア料理　97
D／イタリアの教育事情　100
E／親切なイタリア人　104
(3)イギリス……109
A／イギリスのポリテクニック　109
B／イギリスの今昔物語　112
(4)チューリップとアンネ・フランクの国オランダ……122
(5)北欧の追想……126
(6)西ドイツの回顧……131
A／「鍵っ子」の元祖　131
B／クレッチマー将軍の教訓　142
C／晩年のクレッチマー将軍　146
(7)エーデルワイスの国……151
(8)アンデルセンの国に寄る……156
(9)ウィーンの森の物語……159

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

(10)フランス……164
A／私の体験したフランス人気質 164
B／花はマロニエ、人は武士 169
C／あるフランス人の日本教育観 171
D／教育に過熱しない国 174

Ⅳ アメリカ大陸 177

(1)デミング博士……177
(2)薄いパンツ騒動……180
(3)メキシコ……184
A／人なつこいメキシコ人 184
B／再び国境の町ティファナ 187
C／ラテン気質を見る 189
(4)ヨーロッパ・アメリカの結び……193

●bookdesign 東京書籍AD

異文化に学ぶ

I　国際化に向かう日本

(1)　日本たたき（ジャパン・バッシング）に思う

平成の世となった二月、何気なく入った映画館で、私がその年初めて見た映画は「ダイ・ハード」であった。あくどい日本の商法に制裁を加えるべく、西ドイツのテロリスト十三名がロスアンジェルスにある日本商社ナカトミ（三十数階の情報システムの完備したインテリジェント・ビル）を乗っ取り、人質三十数名を監禁するというアクション映画である。

たまたまロスアンジェルス在住の妻子を訪ねていたニューヨーク州の刑事ジョンが、この事件に巻き込まれる。人質となった三十数名はナカトミの幹部社員で、折りも折り、クリスマス・パーティーを兼ねて三十階の一室に集まっていた。そこに潜入したテロリスト

は、ナカトミの債権六億ドルの放棄を要求する。拳銃一丁しか持たない刑事ジョンは、人質の中にいる妻への愛に賭けて、ミサイル弾や爆薬まで揃えたテロリストに一人敢然と立ち向かう。

この映画は、一九八八年夏にホノルルで上映されたとき、海外進出の波に乗った日本人に大きなショックを与えたという。エル・サルバドルで日本の商社マンが襲われたり、マニラで起こった三井物産の若王子氏の悲劇を併せ考えると、こうした映画が作られる社会的背景は十分あると言わざるをえない。白人社会にとっては、どう見ても日本人は成り上がり者であり、成金としか映らないようだ。日本の企業は儲けるだけ儲けて、利益の地域社会への還元がきわめて不十分と考えられているのではなかろうか。

映画の中のテロリストは、社長ナカトミ氏にピストルを突きつけて、債権書類の入っている金庫を開ける暗号を教えろと迫る。しかし、彼はあくまで要求を拒否し、ついに銃殺されてしまう。このシーンはきわめてリアルに日本人らしい側面を描いていて、迫力さえ感じさせた。今は人びとの記憶に色あせた話だが、「会社は永遠なり」と言ってビルの窓から飛び降りて死んだロッキード事件の某商社の常務をふと思い出した。

映画のナカトミ氏はついに暗号を教えなかった。これが日本人の美学なのだが、外国人には命を賭けて金を守ろうとしたエコノミック・アニマルとしか映らないだろう。戦中・戦後を生きてきた私は、いまさらながら日本はよくぞここまで経済的に再生したものだと驚きつつも、日本商社の世界における評価、外国人の日本人に対する先入観の一端を知らされる思いだった。

十三世紀には蒙古帝国がヨーロッパを席巻してローマ教皇やヨーロッパ封建諸侯の心胆を寒からしめた。今から一世紀前、ロシア、フランスとともに三国干渉を行って日本に遼東半島を返還させたドイツのヴィルヘルム二世は黄禍論を唱えた。黄禍とは、いつの日か黄色人種がヨーロッパ文明、キリスト教文化にとって一大脅威となるであろうという警告である。

アメリカにしてみれば、真珠湾で寝込みを襲った日本が、敗戦によって食うや食わずの飢餓状態に陥ったとき、大量の食料を運んで危機を救ったことを考え併せれば、今日の日本の繁栄にはどこか腹立たしいものがあろう。私たちは、今や自分の伝統文化に閉じこもっているべきではない。日本の企業にも、他の文化を尊重しつつ、どの国の人々ともよき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com